

教育現場における官僚主義的な意識

西郷中学校 後藤光治

1. 問題の所在

これまでにも、学校教育現場における官僚制が問題とされたことはあった。しかし、いずれも理論的領域にとどまり、具体的に教育現場に踏み込んだ研究はあまりなかったようである。そこには次のような状況が存在していると思われる。

(1) 学校の排他性・教師の閉鎖性のため教育現場に足を踏み入れることが難しく、教室への参加的観察が不可能であった。従って教育現場における「官僚制」を内側からどちらえることができなかつた。

(2) 構造・機能主義理論に基づく、教師の地位・役割分析が主流を占めてきた。近年現象学的・社会学に基づくエスノメソドロジカルな手法を駆使した研究が増加しつづあるが必ずしも十分ではない。

(3) 教師研究の「科学的」、「実証的」な研究方法として、調査統計が主流であった。調査統計によって明らかにされる現実は極端に抽象化され、且つ研究者の視点とカテゴリーに規定されたものである。行為者の主観的意味世界や「意識」を問うには不適当である。

本稿は、基本的には教師の意識を問題とする。教育現場における教師の意識の特徴を教師の発行する文書や、筆者の経験の再構成の中から検討し、次の三点を取り出した。

- ① 文書主義
- ② 点検主義
- ③ ことは主義

そして、これら三つの主義が多分にP・J・バーガーらの言うところの「官僚主義的な意識」を反映したものであり、官僚制的な視点から説明可能なのではないかというのがここでの問題設定である。

2. 理論的枠組

官僚制については、マックスウェーバーやR・マートン、ベンティックス等の古典的に完成された理論があるが、ここでは、それらを厳密に検討することが目的ではない。

教育現場に最も適用可能と看取した、P・J・バーガーらが、「故郷喪失者たち」(新曜社)の中で示した「官僚主義的な意識」を説明概念として用いたい。この中で彼らは近代性を知識社会学的に検討し、近代性の特質を「工業生産」と「官僚性」に求めている。それによれば、官僚主義的な意識の特徴とは次のようなものである。

- ① 権限
- ② 照会(権限と関連して)
- ③ 綱羅する
- ④ 適正な手続き
- ⑤ 匿名性

さらに、官僚主義的な意識にともなう認知スタイルの特徴としては次の4点を指摘する。

- ① 秩序整然性(分類志向に根ざした)
- ② 公正さへの一般的期待
- ③ 道義的匿名性
- ④ 目的と手段の不可分性→目的置換に陥りやすい。

P・J・バーガーらがこれらの官僚主義的な意識を知識社会学的に扱っていることには留意しなければならない。つまり官僚主義的な意識や認知スタイルの特徴を理論的に示すのではなく、官僚機構(広い意味での)に生きる社会の成员、つまり現代に生きる我々には上にあげたような官僚機構に関する一般的な知識が存在することを言っているのであって、そのような知識の結果教育現場でいかなる事態が生ずるか、が問題となる。

3. 官僚主義的な意識の発現

先にあげた官僚機構に関する一般的知識の結果から生じたものと思われる、中学校教育現場における教師の教育実践の特徴を、三点指摘する。

(1) 文書主義

- ① 仕事の内容よりも、文書の「できれば」の方が問題とされる。
- ② 生徒に対する具体的教育行為も、文書で表現、あるいは報告するのでなければしことに限らない。
- ③ たとえそうでなくとも、文書でそう言ってしまえば、そういうことになる。
(各学期末の反省によくあらわれる)
- ④ 文書を出せば仕事をしたような気持ちになり、仕事をしたことになる。
- ⑤ 文書を出さないと仕事をしたような気にならないし、仕事をしたことにならない。
- ⑥ 定期的に文書を出していないと焦燥感に襲われ、意味のない文書を出す。
- ⑦ 文書——「網羅する」という内在的特性から無意味な多忙感、繁雑感に陥る。

(資料別紙)

(2) 点検主義

- ① 点検さえ完璧に行えば完璧な教育をしたことになる、という主義の謂。
- ② 「みのがさない教育」イデオロギー
- ③ 総じて否定的な部面のチェックに用いられる。
- ④ 点検自体が目的化し、点検を行っていないと不安になる。

(資料別紙)

(3) ことば主義

- ① 指導を全て「ことばによる伝達」で行う主義の謂。
- ② ことばで伝達すれば、指導は完了しその効果いかんについてはあまり問題とされない。効果がなければ再びことばによって伝達する。
- ③ 教師の人格云々は問題とされないので見かけや話術がものをいう。
- ④ 「教育相談」の隆盛。もれなく平等に声をかける時間。実質的な効果はない。
- ⑤ 標準語の強制=方言の中の親密感の排除。
- ⑥ 全校集会・学年集会の隆盛。

(資料別紙)

4. 考 察

3であげた教育現場における三つの主義がP・リバーガーらのいう官僚主義的な意識から発動していることを示すこそ本稿の目的である。紙面の都合上細かく示すことはできないが、2のP・リバーガーらのいう官僚主義的な意識や認知スタイルの特徴と、3の教育現場における三つの主義とを見較べていきたい。文書主義には「網羅する」特質や、文書を発行すること自体が目的化するという「目的置換」が見られるし、言葉主義には、「権限」や「適正な手続き」「道義的匿名性」などの官僚主義的な意識が反映しているように思われる。

極端にいえば、現在学校で問題となっている現象の多くが、「官僚制」の視点からの説明が可能なのではないかというのが本稿の主張でもある。厳密な論理的・実証的な分析の出現を待ちたい。